

飯舘村スタディーツアーに参加して

国際交流学科 3年 MM

実施日 2016年6月11日
実施内容 13時～15時 菅野さん宅にてお話
15時～17時 役場、長泥でお話
17時～18時 小宮 大久保さんのお庭にてお話
当日の積算線量 $2\mu\text{Sv}$

参加した感想

大学三年生になり、高雄ゼミで飯舘村の現状について少し学んでいたがやはり自分で五感を使って行って見ないと分からないと思い今回私はこのスタディーツアーの参加を決めた。ゼミ内で飯舘村の現状についての説明を聞き、私は「飯舘村は全村避難しているため至る所にフレコンバッグが置いてありそこで人が生活しているような様子はみられない。」というイメージを勝手に抱いていた。しかし実際に行ってみると確かに至るところにフレコンバッグが置いてあったがそれ以上にそこにいる人たち（菅野さんなど）が皆前を向いてこれからどうしようか本気で考えているというのがひしひしと感じられた。これは決して教室の椅子に座って講義を聞いていて分かるものではなく実際にスタディーツアーに参加し自分の目で見て、耳で話を聞かないとわからないものであった。

また、帰還困難区域である長泥の立ち入り禁止のフェンスの前を訪れた時には人が1人もいないという状況を目の当たりにし、線量が菅野さんのお宅などで測った時よりも高く表示されていて『帰還困難』という言葉の持つ重みを感じた。「目の前の桜の木は春になると満開に咲いてきれいなんですよ」と話す菅野さんの表情がとても複雑そうでもしここが自分の故郷だったらと考えても想像しきれない気持ちになった。

私には福島県出身の友人がいる。その友人に今回飯舘村にスタディーツアーへ行くと行ったときに「私の前住んでた（震災前）ところに近いよ」と教えてくれた。友人は大学一年生の時からの仲でお互いになんでも話せるような仲ではあるが、未だに彼女の震災当時の様子について教えてもらったことはない。初めて彼女に出身は福島だと告げられた時に私が「地震のときって…」と言いかけるとすぐに「私のところは平気だったから！気にしないでね！」と言われたのがすごく印象的であったが今になると彼女はきっと「かわいそうに」などという言葉や目で見られたくなかったのかもしれないと思われる。このようなことがあって彼女とはそれ以来東日本大震災を話題に挙げたこともなかった。それは私が彼女を傷つけてしまうかもしれないという思いがあるからである。しかし、飯舘村に行ってみると菅野さんなど多くの方が当時の様子を細かく話してくださっている姿を見ると相当な勇気をもって今、話してくださっているのだなと痛感した。私はここで私の友人は当時の様子を教えてくれなくて嫌な奴だと言いたいのではなく、大半の人が私の友人のような当時そのような場所にいた人たちの周りの人間がその人を傷つけないという考えから自然と「震災」や「原発問題」といった話題を遠ざけてしまうのではないだろうかと思えて感じた。だからこそ菅野さんといったようなさまざまな想いを持って当時の話やこれからの話をしてくださる人はとても貴重な存在だし、福島の人たちだけの問題としてとらえるのではなく日本全体の問題である一人ひとりが自覚していかないといけない問題であるということが今回のスタディーツアーで分かった。そして多くの人が自分に関係のある問題だという自覚を持てば相手の出身地がどこであろうと、たとえ意見が違っていても気まずいと感じることなく議論しあえるのではないだろうかと思えることが出来た。これからは支援するのではなく一緒に復興していきたい。



(大久保さんのお庭で見つけたクローバー)